

歌集

すすき野

歌集

すすき野

森

田

そ

の

歌集 すき野

—非売品—

昭和四十五年十二月二十五日印刷  
昭和四十六年 一月 一日發行

著者 森 田 そ の

埼玉県比企郡都幾川村大野

印刷 (有) 秩父プリント社

大島 功 八

## 序

栗 原 浩

森田その女史は水明の里都幾川村の名門の出であります。森田一族は累代優れた人材が多かったのですが、なかでも女史の伯父に当る森田家十二代の森田耕作は若冠二十三才で名主をつとめその優れた政治的手腕と好学の精神とが相俟って郷党の信望を一身に集めたといわれています。

その女史はこの祖先の血をうけ、加えて清らかな都幾川の流れの音に育まれながら成育したのであります。

わたくしが女史と相識るようになったのは古いことではない。女史の主宰する「ふだん着の会」の集りに招れて都幾川の里を訪れたときからである。「ふだん着の会」とはまことに心憎

いほどの会名であるが、十四五人の主婦たちが心もまたふだん着にくつろいで、素朴な胸を開いて真実と美を求め合っている集いである。それは上手な歌を作ろうとすることではなく、人のおのおのが恵まれている天与の魂を自然のなかに、また人と人とのつながりのなかに発見して豊かな情操を養なおうとしている姿であります。

今度、女史は伯父耕作を追慕するの情やみがたく百年祭を契機に歌碑を建てて自作の歌を献じ得た喜びの機会に「すすき野」を刊行されると聞く。集められた歌は何れも女史の心そのものであり巧拙を超えて人の心に迫るものがあります。それはふだん着の精神であり露ほどの虚飾もない真実の美しさであります。

その女史のまなこの光はよし乏しくなろうともその心の光は澄み切って、女史がこよなく愛する故里の山河を照す弦月のように冴え渡るであります。

吾子たちははるかなりぬ母はけふ秩父札所の地蔵と語る

女史の一首であります、心境のほどが偲ばれて貴い。

森田その女史の豊かな詩心を讃え、百歳の長寿を祈って序といたします。

# もくじ

序

栗原

◇親しい友へ——(序に代えて)——

一 浩

◇昭和三十八年

北海道へ旅行して

二〇

◇昭和三十九年

二七

◇昭和四十年

三二

◇昭和四十一年

三七

野火止行

四二

ふだん着の短歌の会

五二

◇昭和四十二年

五八

◇昭和四十三年

六七

古き蔵をこわす日

七五

◇昭和四十四年

七九

大野峠線開通式

九一

「伊豆の踊り子」を慕ひて

九四

◇昭和四十五年

九七

五月のうた

一〇六

|               |     |
|---------------|-----|
| 毛利師を悼む        | 一〇八 |
| 森田耕作百年祭を記念して  | 一一二 |
| 大伯父の思い出       | 一一四 |
| 奥津城           | 一二一 |
| 公事宿の娘         | 一二四 |
| お地藏さんを建てて     | 一二八 |
| 選挙            | 一三二 |
| 更生の孫          | 一三六 |
| 堂平天文台         | 一三九 |
| 彼岸            | 一四一 |
| 亡き兄           | 一四三 |
| 秩父札所巡り        | 一四五 |
| ◇詩心の湧くままに     |     |
| 婦人会歌          | 一五六 |
| 小学校々歌         | 一五八 |
| ◇見えるうちは読む     |     |
| ―本を読むお母さん入選作― | 一六〇 |
| あとがき          | 一六五 |

## 親しい友へ

### ——序に代えて——

久しぶりのお手紙嬉しく拝見致しました。あなたのお便りはどのようなことでも、それが寂しい哀しいことでも、私はそのつど、それによって慰められ、こころの糧になっております。おっしゃるように、先頃の旅は少し無理な行程で、帰宅後私は大変に疲れましたが、ああ云った宿で、一緒にお風呂に浸り、宿の浴衣にくつろいで、同じお膳のご飯を頂き床を並べて、寝物語りに夜を更かした、一泊二日の行楽はお互いに大した収獲だったと思います。取り返しのつく疲れでした。会と云うものも無駄ではなく、なかなか良いことにも巡り合いますね。

ご多分にもれずこの処、お宅も猫の手も借りたいご多忙の日々をお過しの由、降れば畠の麦が片付かず、照れば水不足で早苗がうえられず、お百姓は天候に支配され、その上肉体労働、大変なこととお察し致します。でも手足を播粉木にしての、その勤労の中には、お夫婦親子の

睦み寄り添い、頼り合つてゐる 泌々としたものが、お手紙の中に読みとられ、私はうれしく、羨やましいものをおぼえました。

現役の家庭でこそ、この味わいのある希望と張りのある建設の日々が送れると思います。

苦しくとも、その生活を くじけず大切に培かつて、その中から日々ささやかな仕合わせを見いだし、それを積み上げ育てて下さい。あなたはまだまだ若いのですもの。

### 史子のこと

今度は、私のくり言を暫くきいて下さい。先日一寸申し上げましたが……十五年間手塩をかけ尽し育てた史子が、この四月九日に私を置いて 去つてしまいました。その取り残された私の寂しさは例えようもなく、胸のつぶれる思いでした。今でもこう書いていると震えがきます。

場所は東京、肉親の父母同胞の処、それは当然帰着すべき順路なのです。それに今度 住宅も求められ、父母はらから打ちつどい 水入らずの申し分のない和やかな家庭を築くのですから、どんなにか祝福して、門出を送るべきを、こうも寂寥を覚えるとは、これは年寄の心弱さ、わがままとは百も知りながら、私はこの寂しさを、克服するどうする術も、わかりませんでし

た。

「四月七日が始業式だが、おばあちゃんの気がすむよう、幾日か延ばしてもよいから」と、その母のこの言葉が、せめて私への精いつばいの同情の発露だったのでしょう。

二日延ばして、九日になりましたが、私の気持ちはすみませんでした。九日に嫁が迎えにきて、母子が睦み合つて大荷物を下げ、手を引き合つて出かける後姿を、門まで見送つて、私はどうしようもない悲しさが込み上げてきてバスまではどうしても見送れませんでした。

空っぽの家へ入り、ひとりで思う存分むせび泣きました。私はその当座は、まるで夢遊病者のようになつてしまつて、縁の柱に寄りかかりひらりひらりと落ちゆく蝶々のゆくえを空ろに追ひ、夕焼雲をいつまでも眺め、深い静けさの沈黙の山のたたずまいを、暗くなるまで仰いでおりました。たまらなく、都幾川の溪谷に下り杲然と川辺に佇み水のささやきに耳を傾けて、柄にもなく哀しさのあまり、詩人の好むという「寂しさの美」を求めることもなく、川原を幾日ともなく独りさまよい歩きました。知らぬ人は自殺者と見るかと、人目を避けて谷路をあるきつづけました。

私はこれまで生みの五人の子、（次女は六才で早逝）それに長女の遺児二人と、七人の子供

を曲りなりにも育て、それぞれ巢立たせましたが……事情あって引き取った（二才の折）孫の史子に、最後の愛情、それが心弱くなった年寄の精いっぱい、盲目的な血汐の一滴までの愛情を注ぎつくした 哀しい末路というものでしょう。

それだけに私の方が史子に弱々しく寄りかかって、すがりきっていたことは事実でした。

実はこの二年間、私はこの話しがいつ持ち上るかと、日々恐怖にかられておりました。東京から長男夫妻が所用で来るたびに、また史子の日常の言葉の端々にも、もしやと怯え心を痛めておりましたが、この分では中学卒業まではと、安心していた矢先、突然この四月初旬、父母と話し合ったらしく 実現したわけです。がこれがもし中学卒業の来年だって、この哀しさは同様で 一年間に達観はできなかったと思います。

史子は芯の強い個性のある なかなかの苦勞人で、そしてお茶目の伶俐な子でした。口笛を吹きならし明るく歌を口ずさみ元気に背戸山を駆け下りてきました。

「おばあちゃん只今」と云って、たわいもない学校のできごとを、手振り足振り面白おかしく話して、寂しい家庭を賑やかにしました。

史子は稀有の読書家で、毎晩いつも夜中過ぎまで、居眠り一つせず読破するその熱意には驚き呆れほとほと閉口しておりました。で、朝はなかなか目が覚めず、朝食をヌキにしたり遅刻も平気でするしまつで、いやに大胆な性をもっておりました。だからよく私と口角泡をとばして、議論に花を咲かせました。私にはまたとない実に明朗な話し相手、けんか相手でした。手厳しく辛辣な批判もいたしました。

こう書いているところへ、史子から上京後はじめての便りがきました。

「おなつかしいおばあちゃん元気ですか」とこう云う書き出しで ユーモラスなことを、チヨイチヨイ入れて書きつらねてあります。人の気も知らないで」と思いながらも遂に失笑してしまいました。

この頃はどうかやら落付き、かすむ目をしばたいて、拡大鏡を通して あらい活字を拾い読みし、こういったにじり書きをあなたに上げるようなゆとりがでてきました。

今日はあれから閉ざしきりの、史子の洋間のカーテンを引き開けて風を入れました。そこには先年、私の貯金を投じて買ってやった ヒアノとステレオが音もなく只冷々と黒く光っております。主を亡くした、寒々とした置きものになってしまいました。これも折角史子に呉れた

ものですので、トラックの便を計り丁寧な荷造りをして近日中に送ってやる積りです。

昨夜は「モーパッサン」の「女の一生」をテレビに目を付けて、久しぶりに見て、泌々とした気持ちに浸りました。昔、若い時読んだ山本有三の、允子の心境に頁をくり明治の母を寂しくしのびました。私の永い生涯には、この山村の旧家の跡目として「家」という因習の下に、何か暗い重いものが、付きまとってきた事と思います。とまれ遠くはなれていても、骨肉の子や孫、なお親しいお友達、知人の幸福が この自分の仕合わせなのだと、そこまで到達した雅量の愛情を贈らなくては、と思いながら人間になる修養しうようが足りなく おおらかな気持ちになれず困っております。ここ数年間にも 私の身边には余りにも不幸が重なっております。世界中で一番信頼し合ってた 長男の家出につづいて 夫の急死 道子の不慮の変死……この三大不幸に私は世の中の灯がいつぱんに消されたような感じでした。

それから私の目は耳は、急に遠くなり 拡大鏡が必要になり、この頃はやたらにテレビ・ラジオに近寄り 音を大きくして、乏しくなる目をしばだたいております。これは人間の力ではどうすることもできない宿命と私なりに諦めております。

それによつて宗教が生れ、合掌の境地にひたり、私はこんなくだらないうろ言の手紙を書き、

あなたに読んで頂くのも 一つの救いなのでございます。

今日は暗いことのみ書き列ねましたが、遠からず私の身边にも ほのぼのとした明るい兆しが見えるやに思われます。そのことは又後便にゆずりますから 楽しみにご期待を願います。

何卒 余り過労なさらぬよう あなたの 健康と明るさが、お宅の皆さんの 特にお子さん方のお仕合わせになることを お忘れなく呉々もお大切に 日々をお送り下さるようお祈り申し上げます。

六月二十五日

#### 七年目の二伸

あなたに、あの長い手紙を上げてから、もう七年の年月が夢のように過ぎてしまいました。

あれから私、朗報の便りどころか、白内障が日々つのり、糸筋ほどの光りの中に、暗黙の世界をさまよっております。あなたのお家庭もその間、種々にお変りなされた事と存じます。幾度か温いお便りは頂きながら、ご返事も書けず、失礼しておりました。

六つも持っている眼鏡の一つも拡大鏡を通す視力がなく、その二年間の私の寂もりはたまりませんでした。医師は、無論活字どころか、静かに散歩しながら遠い山をながめているように

との宣言でしたので、本は側へ置くだけで、私はひたすらラジオにすがりついておりました。

“ 宗教の時間 ” “ 盲人の時間 ” “ 文化講演 ” “ 古典講座 ” “ 詩の朗読 ” などひとり静かにきき入り、暗い中にも光明を見いだしました。

若い時、そらんじていた啄木、牧水の歌になぞらえて、花に目をつけ、香を求めて、月を仰ぎ、幼なく指折り数えて、歌のようなものを口吟み、かすかな光りの下に太いマジックで帳面に記す楽しみもおぼえました。

ほとほと人間関係に疲れた時、杖にすがり、都幾川の溪谷に腰を下し、野鳥の声をひとりきいていると、人間には求められない感情の美しさが野鳥との間に湧き、自分が生きかえったような新鮮さをおぼえます。この頃、休猟区になった大野に、野鳥は群れて、浦山から尾長鳥、ひよどり、かけす など、わが窓の辺に来て、池で水を飲み、日々に私になれ、良き友になってくれます。

視る力乏しき吾に浦山の野どりは群れ来窓近く啼く

前山に去年から、雉子の二番いが棲みつき、朝末だきより鳴きひとり居の目覚めを楽しませ、昼近くになると前畑に下り、小麦畑に餌を抬うさまをおぼろに見る時は、得もいわれぬ山狭の

自然美です。この境地にひたっている折柄、埼玉県立図書館から、「本を読むおかあさん」の読書感想文の募集がありました。私は、これが最後の読書と、武者小路実篤の粗い字の小冊子、若い時感動して読んだ漱石の「こころ」を糸筋ほどの光りを頼り、眼鏡に拡大鏡をつけ、幾度となくめまい、吐気の襲うのを梅干を口に入れ、水を飲み飲み百ページに満たない短篇を一カ月かかってかうじて判読して「見えるうちは読む」の題のもとに出しましたら、その執念が通じてか、年寄への同情か、奇跡にも入選いたしました。（四十一年度）

これで私は活字と離別と思いましたが、その当時出た『島秋人』の『遺愛集』を、またまた性懲りもなく求めたものの、今度こそ少しも見えず、読んでくれる侍女とはなく、嫁に、時たま来る孫に頼み、読んで貰うのに実に三カ月以上もかかりました。読めない不自由さが心に泌み渡りました。

昨春、家人、その他開眼手術をした方の親切な勧めもあり、私もようやく決心して、東京の順天堂眼科に診察に行き、手術の可否をたずねましたら、

「老齢ではあるし、心臓も衰弱しているから……」

と少し懸念され、

「手術しますか」

と申されましたので、

「先生、手術をすれば活字が見えるようになりますか」 私の一言に

「その意気なら、必ず成功しますよ。」

と手術にかかりました。

左眼だけで、約四十分の手術時間でした。小山いと子さん（私の従妹、大谷藤子の作家仲間）も、この病院で手術して開眼なされ、お仕事を続けていると、診察に来られる度毎に、私の病室まで寄られ、力づけて下され、思わぬ知己の人を得ました。

手術も無事にすみ、予後も殊の外順調で、三週間の後退院になりました。活字を見るのと、遠くを見るのと重い程分厚な眼鏡を二つ購入して、帰宅して暫くは静養しておりました。

一カ月の後、ある晴れた朝窓を明け、ながめると、前山の山吹の花が見えた時の喜び……  
思わずこんな歌が浮びました。（無論遠見の眼鏡をかけて）

前山の杉の木の間にしだれ咲ける山吹ほの見ゆ手術せし瞳に<sup>め</sup>